ローザ・ルクセンブルクと山田盛太郎『日本資本主義分析』

中　根　康　裕

始めに―侵略と流血の資本主義史の総体的把握のために―

現下に進行中の，ウクライナ民衆に対するロシアの侵略戦争,「天井なき監獄」パレスチナ・ガザ地区民衆に対するイスラエルの大虐殺。正しく，資本主義の全歴史はその誕生以来，間断なき侵略と流血の歴史である。そして同時に国際労働者階級とその子弟が軍人=「戦争奴隷」として戦場に駆り立てられ，支配階級の奴僕としての死を強制されてきた歴史である。この，人類の未来を担う人々の子弟が軍人として殺し合う悲惨を即時無条件で停止させる努力は，諸学派を超えたマルクス学徒全体の最大にして喫緊の任務である。そしてそれが資本主義の総体的な把握を要請する。

本稿は，資本主義の総体的把握という社会科学の根本問題に対峙したローザ•ルクセンブルク（1870-1919年）の『資本蓄積論』第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」に焦点を当て，その理論的復権を企図する。その上で，ルクセンブルクの理論的な特長である【純経済過程と政治的暴力の連関把握】という視角が戦前日本で山田盛太郎（1897-1980年）『日本資本主義分析』に継承されたことを論証する。そしてこの視角がマルクス主義にとって決定的な重要性を持つ事を示唆する。

Ⅰ　ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」の検討：資本蓄積の帝国主義段階と軍国主義的蓄積

迫りくる人類史的悲惨＝第一次帝国主義世界大戦に身をもって反対し，兵士虐待抗議の反戦演説のゆえに投獄され，出獄後すぐにドイツ革命の最中に斃れるも，その生涯を偉大なる鷲[1]（レーニン）と評されたローザ・ルクセンブルク。本章では彼女の『資本蓄積論』において「決定的に重要」な編[2]（ルカーチ）とされる第３編「蓄積の歴史的諸条件」を，その第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」に焦点を当てつつ検討する[3]。

マルクスは『資本論』第１部第７篇「資本の蓄積過程」全体，なかんずくその第24章第７節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」において資本蓄積の歴史的な制限傾向の基礎的な論証を試みた。ルクセンブルク『資本蓄積論』はそれを『資本論』第２部の再生産論次元において，純経済過程と政治的暴力の連関把握という視角から改めて論証（それを通じて『資本論』再生産論の未完成部分を補足）しようと試み，同時に，資本蓄積の歴史的制限傾向の最終局面として帝国主義段階を論定しようと試みた。その『資本蓄積論』第３編の総括が第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」であるからである。

1　ルクセンブルク『資本蓄積論』第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」の位置づけを巡る先行研究概観

ルクセンブルク『資本蓄積論』第３編「蓄積の歴史的諸条件」の最終章に位置する第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」は，私見によれば，

1）レーニン〔1922〕「政論家の覚書」邦訳『レーニン全集』第 33 巻，207～208頁。
2）ルカーチ〔1921〕訳書74頁，尚，参考文献は本稿の末尾に一括して挙示する。
3）本章の叙述は中根〔2018〕を基礎とし，大幅に加筆したものである。

資本蓄積の帝国主義段階における【軍需品生産に依存した蓄積】（以下，【軍国主義的蓄積】と略す）の問題を検討し，それを通じて第３編の先行諸章で論定してきた諸規定を最終的に確定する総括章である。だが，実は今日までの所，第32章を『資本蓄積論』の総括章であると位置づけた研究はほとんど無い。

それはルクセンブルク『資本蓄積論』の所論を擁護・評価しようとする諸論者においても例外ではない。例えばローラ〔1930〕は第32章を帝国主義の「典型的現象」[4] としての軍国主義を論じた章であると捉えるに留まっている。また山田〔1956〕も第32章については軍需品生産表式把握の「注意点」[5] に触れる観点から言及するに留まっている。さらに松岡〔1988〕も第32章については「ユニーク」ではあるが「補助的」[6] な章であると位置づけるに留まっている[7]。

しかし筆者は，こうした諸理解ではルクセンブルク『資本蓄積論』の所論について最後まで首尾一貫性を持たせて把握することは困難であると考える。筆者が辛うじて第32章をルクセンブルク『資本蓄積論』第３編の論理構成上の基軸として位置づけた論稿として知り得るのは，第３インターナショナル綱領草案の起草討議の始まりとボルシェビキ党内闘争の激化という緊迫した政治状況下，ルクセンブルク『資本蓄積論』がボルシェビキの主流から総批判にさらされる中，独自にルクセンブルク理論を摂取しようと試みた異端のボルシェビキ，マトゥイレフ〔1923〕の所論である。

マトゥイレフは，資本蓄積に関する「ローザの業績」は「レーニン，ブハーリン」らによる「帝国主義の理論的解明」を「著しく補強する」[8] とし

4）ローラ〔1930〕訳書「序文」９頁
5）山田〔1956〕『著作集』第５巻149頁
6）松岡〔1988〕248頁
7）報告者はこの３人の論者の所論からルクセンブルク『資本蓄積論』に関する幾多の学びを得ており，ルクセンブルク研究の総体において3人の論者を高く評価している。ここでの指摘は第32章の位置づけに照らしてのものに過ぎない。
8）マトゥイレフ〔1923〕訳稿299頁

た。そして第32章においてはルクセンブルク蓄積論の基礎(「非資本主義的領域」に対する「市場」の持続的「拡大」[9] の必要性）との内的連関を保って「ミリタリズム」の「役割」が「詳細に解明」[10] されているとし，資本蓄積における非資本主義的社会経済領域の必要性こそが「資本主義的拡張主義」[11] の根本的動因であるとした。また拡張主義一般と帝国主義の「質的区別」へ注意を促し,「一定の条件」下で拡張主義の「量的蓄積」が「質の転化」に「移行」して資本主義を「帝国主義に変形」[12] させるとした。さらにルクセンブルク『資本蓄積論』はミリタリズムの「本性」の「一層深い解明」[13] を可能にするとし，軍国主義は「帝国主義の不可避的な帰結」であり，「蓄積を容易」にする「顕著な役割」[14] を演じると論及した。

筆者の知る限り，マトゥイレフのこの所論はルクセンブルク『資本蓄積論』第32章を正当に位置づけたまことに稀有なものである。本稿はマトゥイレフのこの所論に十分注意を払い，第32章の論理構成を検討する。

2　ルクセンブルク『資本蓄積論』第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」の論理構成：資本蓄積の帝国主義段階と軍国主義的蓄積

ルクセンブルク『資本蓄積論』は第一次帝国主義世界大戦前夜の実践活動を縫って僅か半年間という短期間で執筆された。そのため，もし各章に節題や項題が示されていれば，彼女の論旨が一層分かり易くなった事は否めない。

そこで第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」については筆者が暫

9）マトゥイレフ〔1923〕訳稿314頁
10）マトゥイレフ〔1923〕訳稿314頁
11）マトゥイレフ〔1923〕訳稿322頁
12）マトゥイレフ〔1923〕訳稿322頁
13）マトゥイレフ〔1923〕訳稿324頁
14）マトゥイレフ〔1923〕訳稿324頁

定の節区分を設け，仮の節題を付してみたい（頁数は長谷部訳〔1934〕下巻のもの)。同章の論理構成を検討する際の一助になると思われるからである。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」

■第１節：問題の提示－軍国主義の「蓄積領域」機能の前面化－
（198頁冒頭〜同頁12行目「…蓄積の一領域のように見える」まで）

■第２節：問題分析の条件－「国家」範疇の導入－
（198頁12行目「誰が…」〜202頁９行目「…観察さるべきである」まで）

■第３節：問題分析①：国内労働者階級収奪による国家の兵器需要と蓄積の質的変化－帝国主義本国の「内的」市場と「特殊」的蓄積領域との関係変化－
（202頁９行目「労働者階級に関して云えば…」〜215頁４行目）

■第４節：問題分析②：国内小農層収奪による国家の兵器需要と蓄積の質的変化－帝国主義本国の「外的」市場と「特殊」的蓄積領域との関係変化－
（215頁５行目〜217頁２行目「…国家の需要が現れる」まで）

■第５節：問題分析③：国家の兵器需要に依拠した蓄積の特質－蓄積の律動性と加速性－
（217頁２行目「ところがかかる需要は…」〜同頁13行目）

■第６節：問題の総括：軍国主義的蓄積の資本主義揚棄の促迫力への転化
（217頁14行目〜218頁12行目）

■第７節：第３編総括：歴史的矛盾としての資本主義生産様式の表現としての資本蓄積
（218頁13行目〜219頁末尾）

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

以上である。節題の通り，第32章は，❶政治的暴力を体現する常備軍の物的基礎たる兵器への国家需要が社会的総資本の蓄積運動に与える影響の

分析という独自課題を持ち，❷それはルクセンブルクによる資本蓄積の重層的展開論（第27～29章）および帝国主義論（第30～32章）の論理的帰結として提出された基軸問題であり，❸この問題の解明により資本蓄積の帝国主義段階が最終的に論定され，❹資本蓄積の歴史的過程全体，従って資本主義の歴史的本質をも確定し得ることが窺える。

以下，その論旨を各節間の連繋および先行諸章の規定との連繋において検討する。尚，煩雑を避けるため，当該節内からの引用に限って頁数の挙示を省く。

■第１節：問題の提示－軍国主義の「蓄積領域」機能の前面化－

本節は『資本蓄積論』第3編「蓄積の歴史的諸条件」の従前諸章の全行論を受け，軍国主義が資本蓄積の「あらゆる歴史的段階」において政治的暴力の執行者として「確かな機能」を果たしてきたことを概括し，その上で第32章の独自課題として，軍国主義の「純経済的」側面について，換言すれば，軍国主義の「蓄積の一領域」としての機能について問題を提示する。

以下，第3編の先行諸章の各小括を結節点とするルクセンブルク『資本蓄積論』の基軸論理を概括しつつ，この問題提示をその中に位置づけ返す。

ルクセンブルク『資本蓄積論』第３編は，❶蓄積は「資本化さるべき剰余価値」を「実現」するために「非資本主義」的「社会」経済領域を「必要」とし（資本主義的拡張主義の最奥の根拠＝【第26章末の小括】[15]），当該領域への絶えざる拡張とその「商品経済」化，次いで「資本主義経済」化を継起的に推し進めること（資本蓄積の「重層的展開」[16]＝【第29章末の小括】[17]），換言すれば，蓄積は資本主義経済の「内的」[18]市場での「純

15）ルクセンブルク〔1913〕訳書59-63頁
16）松岡〔1988〕が与えた規定に依拠している。
17）ルクセンブルク〔1913〕訳書140-142頁
18）ルクセンブルク〔1913〕訳書62-63頁。そこにおいて，ルクセンブルクは「内的」および「外的」市場について，それが決して「政治的地理学」上の概念（国内市場と外国市場の相違）ではなく，「社会経済学」上の概念（資本賃労働関係が支配する社会経済領域とそれ以

経済的な過程」の側面と，資本主義経済と非資本主義的社会経済領域なる「外的」[19] 市場の間での「政治的暴力」過程の側面との統一的「全体」過程としてのみ進行すること（純経済過程と政治的暴力の統一過程としての蓄積＝【第31章末の小括】[20]），以上の規定を基軸論理とする。

そして，❷蓄積の重層的展開の帰結としての新興資本主義諸国の勃興の必然性（【第29章末の小括】）と，資本主義諸国間の蓄積領域残部を巡る争闘＝「世界的競争」段階への推転として「資本蓄積の帝国主義段階」の端緒を規定（【第30章冒頭の規定】[21]）する。

続けて，❸蓄積領域残部をめぐる争闘が，帝国主義的「競争諸国の間の対立の激化」を招き寄せ，この両面（＝蓄積領域残部としての非資本主義的社会経済領域をめぐる争闘とそれが促迫する帝国主義的資本主義諸国間の直接対立）から，帝国主義段階を本格的に規定（【第31章冒頭の規定】[22]）する。

さらに，❹政治的暴力の執行者として位置づけられてきた軍国主義が，帝国主義段階におけるその執行能力の肥大化の要請と共に，「純経済」過程における「蓄積の一領域」へ前面化（【第32章冒頭の規定】[23]）する質的転化を遂げたとし，帝国主義段階を軍国主義的蓄積への転化段階として再規定する。それゆえ軍国主義が蓄積問題の焦点に位置づけられ，上述の端的な問題提示となる。

以上の全関連の内に，この問題提示がルクセンブルク『資本蓄積論』第３編の基軸論理の帰結として提出されたものであり，この問題の解明を通じて基軸論理が確定されることが明瞭である。この点の把握はルクセンブ

外の社会経済領域の相違：例えばドイツ資本にとりドイツ国内の小農民層は「外的」市場）であることを反復強調している。

19）前掲注18を参照

20）ルクセンブルク〔1913〕訳書196-197頁

21）ルクセンブルク〔1913〕訳書143-144頁

22）ルクセンブルク〔1913〕訳書187-188頁

23）ルクセンブルク〔1913〕訳書198頁

ルク『資本蓄積論』第3編全体の論理の一貫的把握にとって決定的となる。

■第２節：問題分析の条件－「国家」範疇の導入－

本節は蓄積の帝国主義段階における軍国主義的蓄積の分析の条件を検討し，労働者階級と小農（単純商品生産者層の代表者）の収奪＝租税収入による国家の兵器需要という問題の分析に際し，常備軍の物的基礎である兵器を購買する主体としての「国家」範疇を導入することが不可欠であるとする。

すなわち蓄積問題の分析に際し，前章まで国家を捨象できたのは，❶国家が「資本主義的剰余価値」と「資本主義的労賃」の「外」に「租税源泉」を「有たない」こと，❷国家が「官吏」と「戦争奴隷」（軍人のこと－筆者注）の「個人的消費」機関としての限りにおいて取り扱われていること，以上であった。この時，官吏・軍人の個人的消費が労働者階級からの徴税で賄われたとすれば，それは「労働者階級から資本家階級の従属者への，消費の部分的譲渡」を意味したに過ぎず,「資本化される剰余価値の実現の手段」にはなり得ないからである。

しかし，今や問題は，労働者階級と小農から「租税制度によって国家の手に集中された金」が兵器需要へ向かい，従って「軍需品の生産」へ「振り向けられる」点に遷移する。蓄積問題の分析の前提に根本的変化が生じたのである。ゆえに「国家」を独自範疇として導入しなければならないとする。

■第３節：問題分析①：国内労働者階級収奪による国家の兵器需要と蓄積の質的変化－帝国主義本国の「内的」市場と「特殊」的蓄積領域との関係変化－

本節は「国家」範疇の導入を受け,「特殊」的性質を持つ蓄積領域としての軍国主義的蓄積を，帝国主義本国の「内的」市場の一角を構成する労働者階級の購買力剥奪との関連において分析し，総資本の見地からは労働者

階級の購買力減少は冗費（労働者階級の扶養費）の節約と認識され，同時に，国家の側に生じる兵器需要は，総資本にとって特殊的な購買力として認識され，蓄積へのあらゆる刺激を与えるとする。

すなわち軍国主義的蓄積の分析に際し，決定的重要点として，総資本にとっては労働者階級の扶養は剰余価値生産のための「不可避的悪」であり，ゆえに労働者階級向けの消費資料生産部門の縮小は総資本にとっては販路の喪失では無く「冗費の節約」と認識され，蓄積を目的とする資本主義生産様式にとっては労働者階級の維持は剰余価値生産の前提でこそあれ,「剰余価値の実現の手段では決してない」ことを強調する。

同時に，総資本の見地からは，国家による兵器需要は蓄積に充てられる剰余価値部分の実現および再資本化のために「あらゆる刺戟」を与える「新たな領域」であり，その財政源泉である税収は，最初に「可変資本」として生ける労働を汲み出して剰余価値を生み，その後，間接税を中心とする「租税」徴収により労働者の賃金の一部が流通から脱落する形で国家の手中へ移り「新たな需要」源泉に転化したものであり，総資本にとって「外的な購買力」になるとする。

■第４節：問題分析②：国内小農層収奪による国家の兵器需要と蓄積の質的変化－帝国主義本国の「外的」市場と「特殊」的蓄積領域との関係変化－

本節も「国家」範疇の導入を受け,「特殊」的性質を持つ蓄積領域としての軍国主義的蓄積を，帝国主義本国の「外的」市場の中心を成す小農（単純商品生産者の代表）の購買力剥奪との関連において分析し，総資本の見地からは，単純商品生産者層の時間的・場所的にバラバラな小規模購買力を剥奪しても，代わりに大規模な国家需要が形成される方が総資本にとって一層大きな蓄積への刺激になるとする。

すなわち軍国主義的蓄積の分析に際し，決定的重要点として，蓄積されるべき剰余価値部分を実現する購買層たる「手工業者」と「農民」に代表

される「非プロレタリア的消費大衆」（帝国主義本国内の「外的」市場を構成する「単純な商品生産」者層）から国家が租税としてその購買力の一部を剥奪して手中に収めることで，かかる単純商品生産者層の時間的・場所的にバラバラな小規模購買力とは比較にならない程に「大きな統一的な充実されたものに総括」された国家の需要が創出され，同時に金納課税の強化により単純商品生産者層を急速に深く「内的」市場に包摂して行くとする。

■第５節：問題分析③：国家の兵器需要に依拠した蓄積の特質－蓄積の律動性と加速性－

本節は，軍国主義的蓄積が総資本に最初から最新かつ最大規模の産業を要請し，それにより蓄積に最も適合する生産力の条件を与え，また他のあらゆる蓄積分野と異なり，国家の兵器需要に基づく蓄積の場合には総資本自身の内に増加の契機が握られ，当面は自動的で律動的な蓄積が可能であるとする。

すなわち軍国主義的蓄積の分析に際し，決定的重要点として国家の兵器需要が，❶最初から「最大級の大工業」を要求して「剰余価値生産および蓄積にとって最も好都合」な生産力展開を「前提」し，❷他の全ての蓄積領域が「歴史的・社会的・政治的諸契機に依存」する程度が「甚だしい」のに対し，国家の兵器需要はかかる諸契機に左右されずに「自動的な規則正しさ」と「律動的な増加」をもってする蓄積が可能であり，❸兵器需要を加速させるテコも「資本そのものの掌中」―ブルジョア「議会による立法」と「いわゆる世論の生産に予定された新聞事業」―にあるとする。

それは蓄積の歴史的運動の帰結として，帝国主義段階では純経済過程への政治的暴力の内面化が進行せざるを得ないという，蓄積運動の質的変化（蓄積の手段としてではあるが人間社会の再生産の担い手であった資本が，人間社会の破壊手段に依拠した蓄積へと重心移行すること）の必然性の論証に他ならない。

■第６節：問題の総括：軍国主義的蓄積の資本主義揚棄の促迫力への転化

本節では「国家」範疇を導入して行われた軍国主義的蓄積の分析が総括される。すなわち，❶帝国主義本国における国家の兵器需要に依拠した蓄積の増大は，その依拠する財政源泉としての租税徴収を通じ，労働者階級の生活条件低下と農民（に代表される単純商品生産者層）の生産手段剥奪を伴うために労農同盟を招来し，❷労働者階級と農民を犠牲にしながら進む非資本主義的社会経済領域への侵略強化とそれが促迫する帝国主義諸国間の争闘の激化，およびその中で進行する加速的蓄積は，ある高度において，植民地・従属国での反帝闘争の進展と帝国主義本国での労農同盟の進展の両面から，両者の連帯＝「国際労働者階級の反乱」を「必然」化させ，資本主義生産様式そのものを揚棄する基礎条件へ転化するとする。

この，蓄積の帝国主義段階の論理的帰結としての軍国主義的蓄積の必然性とその特殊的性格の論定および変革展望の示現が，ルクセンブルク『資本蓄積論』の帝国主義論を総括するものであり，第32章の決定的地位を明示する。

■第７節：第３編総括：歴史的矛盾としての資本主義生産様式の表現としての資本蓄積

本節では，前節における帝国主義論の総括を受け，帝国主義論へと帰結する第３編全体の基軸論理そのものを再論し，確定する。

すなわち資本主義生産様式は，❶資本蓄積の条件である所の「培養土としての他の経済形態なしには・存在しえない」が，同時に「世界に拡がって他のすべての経済形態を駆逐する傾向」を持ち，強烈な「世界的形態」への「傾向」＝指向性を有する生産様式であること，❷しかし，理論上の「傾向」としての次元のものであるが，蓄積の培養土としての非資本主義的社会経済領域の完全併呑は蓄積条件の解消をもたらす（この点につき，ルクセンブルクはあくまで理論上の「傾向」であり，理論的擬制であること

に再三注意を促している）ゆえに，資本主義は「世界的形態」への指向性を強烈に有しつつも決して世界的形態「たり得ない」生産様式であり，それ自体「一個の生きた歴史的矛盾」であるという本質規定を与え，過渡的な生産様式であることを最終的に確定する。そして労働する人間自身の生活欲求の充足を生産目的とする高次の共同制社会への移行を展望して締め括る。

この，第３編の基軸論理の再論を通じる資本主義生産様式の歴史的地位の最終確定が『資本蓄積論』第３編の全体を総括し，第32章の決定的な地位を二重に明示する。

３　ルクセンブルク『資本蓄積論』第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」の基本性格：『資本蓄積論』第３編の二重の総括章

以上の行論において，ルクセンブルクが『資本蓄積論』第32章において帝国主義段階に顕著となる国家の兵器需要肥大化の意義を浮き彫りにし，軍国主義的蓄積への重心移行による蓄積の質的変化をその歴史的制限傾向の具現として論定し，それを通じ，彼女自身の帝国主義論（第30～32章）の総括と第３編（第25～32章）全体の総括という，二重の総括を行っていることを示した。

以上の確定はまた，❶帝国主義を資本主義の必然的な段階としてではなく選択的政策の一つとし，「対外政策」の「偶然的な表現」に過ぎないと捉える「ブルジョア的自由主義的な理論」[24] の見地，❷帝国主義の根拠を蓄積領域の「独占化」と「利潤の分配」をめぐる「個々の資本群」間の「内部的競争戦」を基礎とする「カルテル」や「トラスト」という帝国主義段階の「特殊的現象」[25] に求める理論の見地（ヒルファディング，その批判

24）ルクセンブルク〔1913〕訳書197頁
25）ルクセンブルク〔1913〕訳書204頁

的継承者であるレーニンの見地にも及ぶ), こうした諸理論の限界性に対する経済学批判の役割を担うことになる。

銘記すべきは第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」を『資本蓄積論』の【二重の総括】章として理論的に位置づけること，それがルクセンブルク『資本蓄積論』を内在的に理解する上で決定的であるということ，これである。

4　ルクセンブルク『資本蓄積論』第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」の歴史的含意：資本蓄積の「惨事創出」段階

かかるルクセンブルク『資本蓄積論』第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」はひとつの歴史的含意を持つこととなる。すなわち，資本蓄積の帝国主義段階では人間社会の破壊手段である兵器需要に依拠した蓄積へ重心が移行し，その質的な変化が生じ，蓄積の【「惨事創出」段階】[26] へ推転することである。

この歴史的含意は，国際的規模での社会変革への前進か，さもなければ【現代的野蛮】[27] への国際的退行かという示唆に及ぶものである。すなわち国際労働者階級による危機の変革的な打開が封殺される限り，帝国主義世界大戦―核「冷戦」軍拡―「原発」人災という歴史的惨事の創出による人為的な野蛮状態への逆行が資本によって強制され，この人為的荒廃状態から【再版＝原始的蓄積】[28] を反復せざるを得ないという資本蓄積の退廃的な柔軟性を把握する論理を内包[29] するものである。

26）ルクセンブルク〔1920〕訳書196頁。そこでは「経済的および政治的」な「大惨事」は資本蓄積の帝国主義段階においては資本の「正常的」な「存在形態」であるとされる。

27）ルクセンブルク〔1916〕訳書277-280頁

28）山田〔1962a〕『著作集』第5巻5頁。山田はここで，軍事的半農奴制的日本帝国主義の崩壊と占領下の民主主義革命およびアメリカ帝国主義占領軍権力によるその圧伏過程を総括し，「旧秩序の変革」と並行した「再版＝原始的蓄積」過程と精確に把握した。

29）世上には長く，極めて皮相な見方として，ルクセンブルク『資本蓄積論』の所論は資本主義の自動崩壊論であると言う論難が存在するが，ルクセンブルクの所論は実際にはそれとは真

ルクセンブルク『資本蓄積論』は第一次帝国主義世界大戦中，第２インターナショナル指導部を占める所謂マルクス主義中央派（オットー・バウエル他）から集中砲火を浴び，さらに所謂戦間期，第３インターナショナルを主導するボルシェビキの主流（ブハーリン他）から総批判の対象とされた。しかし，幾度葬られても同書は甦り，国際労働者階級の苦闘を鼓舞し続けている。その所以は，資本主義の歴史的発展過程の総体的把握の深みにあると考えられる。

ルクセンブルクはその獄中書簡に溢れている通り,「人間と自然に対する温かい情愛」[30] を精神の内奥に湛えた「シジュウカラ（社会と自然の弱者－筆者注）の側に属している人間」[31] であるがゆえに苛烈な反戦闘争を担い切り，一切の理論的権威を前にしても，真理にのみ仕えるという学問的良心を貫き得たのである。そしてマルクス『資本論』の未完成部分に対しても, マルクスの精神に沿って補足を行うことを躊躇しなかったのである。

Ⅱ　山田盛太郎『日本資本主義分析』第２編「旋回基軸　軍事機構＝キイ産業の構成」の検討：日本資本主義の再生産過程の強力的性質と顚倒的矛盾

帝国主義世界体系の脆弱で凶暴な環たる日本帝国主義の「運命的段階」[32]＝満州事変の勃発に対峙し，ルクセンブルク『資本蓄積論』が追究した，資本蓄積における「純経済過程」と「政治的暴行」の連関把握の視角を「帝

逆である。ルクセンブルクは資本蓄積の歴史的な制限傾向の終結点はあくまで理論的な擬制に過ぎないと強調している。例えばルクセンブルク〔1913〕訳書141頁を参照。

30）中根〔2022b〕37頁。尚，ルクセンブルクの獄中書簡の翻訳者である秋元寿恵夫はその一通一通が「時代を超えて」人々に「読み継がれる」だろう「第一級」の「文学作品」であると述べている。この点も中根〔2022b〕37頁を参照されたい。ルクセンブルクの獄中書簡はまことに詩の響きを持っている。

31）中根〔2022b〕43頁。

32）山田〔1968〕『著作集』別巻101頁

国主義論」[33] として継承し，同書に対するルカーチの論評[34] も睨みつつ，『日本資本主義発達史講座』（編集首座：野呂栄太郎）へと参加した山田盛太郎。本章では彼の『日本資本主義分析』を第２編「旋回基軸　軍事機構＝キイ産業の構成」に焦点を当てて検討する。

ルクセンブルクは『資本蓄積論』第３編「蓄積の歴史的諸条件」全体，なかんずくその第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」において，純経済過程と政治的暴力の連関把握という視角から資本主義の歴史的な制限傾向の総括的論証を試みた。山田『日本資本主義分析』は純経済過程と政治的暴力の連関把握という視角を帝国主義論として日本資本主義の現状分析の次元へ具体化しようと試み，同時にそこから労働―変革主体論へ切り返そうと試みた。その『日本資本主義分析』の「背骨」[35] が第２編「旋回基軸　軍事機構＝キイ産業の構成」であるからである。

１　山田『日本資本主義分析』第２編「旋回基軸　軍事機構＝キイ産業の構成」の位置づけを巡る先行研究概観

2024年は山田『日本資本主義分析』刊行90周年であるが，今日に至るまで『日本資本主義分析』の全体構成を巡って大きく二つの見地が並立している。

ひとつは第１編「生産旋回＝編成替え」と第３編「基柢」両編を軸とみる見地であり，その上で『日本資本主義分析』の主要課題は日本資本主義の産業資本確立期分析であるとする見地である。そして資本と土地所有の相互関係把握という点に『日本資本主義分析』の特徴を見て，その点を基準に評価を加える。主な論著には神山〔1947〕, 長岡〔1980〕, 山崎〔1989〕, 大内〔2000〕などが挙げられる。

33）山田〔1929〕『著作集』別巻151頁
34）山田〔1929〕『著作集』別巻153頁
35）中根〔1999〕50頁

今ひとつは第２編「旋回基軸」を軸とみる見地であり，その上で『日本資本主義分析』の主要課題は日本資本主義の体制的危機期分析であるとする見地である。そして資本運動における純経済過程と政治的暴力の相互関係把握から労働―変革主体論に切り返すという点に『日本資本主義分析』の特徴を見て，その点を基準に評価を加える。主な論著には内田・田添〔1949〕，南〔1977〕，大島〔1982〕，後藤〔2002〕などが挙げられる。尚，筆者による中根〔1999〕〔2002〕もこの見地からのものである。

ここで中根〔1999〕における報告者の見地を再度略述すれば，『日本資本主義分析』第２編「旋回基軸」は純経済過程と政治的暴力の連関把握の視角から日本資本主義の「基本矛盾」と「資本関係揚棄の遂行主体」の問題を検討し，山田が対峙する体制的危機下の日本資本主義の「総体的な現状分析」を遂行する《主編》であり，全編の「背骨」であるとみるものである。そして，日本資本主義の諸搾取範疇の問題を検討する第１編「生産旋回＝編成替え」は第２編の分析により確証される《副編》であり，資本主義の諸搾取範疇との関連において土地所有＝地代範疇を検討する第３編は第１・２両編に対する《補編》であるとみるものである。

また筆者は，山田が「在野」となる際に「研究姿勢上の意識的飛躍」[36]をかちとる中で初めて『日本資本主義分析』が誕生したと考える。以下，第２編「旋回基軸」の論理構成を改めて検討する。

２　山田『日本資本主義分析』第２編「旋回基軸　軍事機構＝キイ産業の構成」の論理構成：日本資本主義の再生産過程の強力的性質と顚倒的矛盾

山田が『日本資本主義分析』において終局的な課題としたのは彼が対峙する体制的危機下の日本資本主義の総体的分析である。第一次帝国主義世

36）中根〔2015〕67頁

界大戦とロシア十月革命の勝利という「現実的なるもの」,すなわち「革命の現実性」[37]（ルカーチ）が分析主体たる山田に「全機構的」な「把握」を「押し付ける」[38] のである。「構造揚棄」（＝革命）の「必然性」と「条件」[39] の解明が課題に上る限り，把握は分析対象―主体にまたがり全機構的でなければならないからである。

それでは全機構的な把握とは具体的に何か。それは「範疇的な点」と「段階的な点」という二つの「基本視角」から「要約」[40] し得る。そこで『日本資本主義分析』第２編「旋回基軸」における純経済過程と政治的暴力の連関把握の視角を追究するという筆者の問題関心に沿って,まず「段階的」視角に触れ，その上で「範疇的」視角に触れよう。

A　山田『日本資本主義分析』の主導的視角：日本資本主義の帝国主義「直接転化」論

山田『日本資本主義分析』における「段階的」視角とは「軍事的半農奴制的資本主義」日本の「原始的蓄積」から「一般的危機」に至る全生涯的「過程」を把握することであるとされる。すなわち,ルクセンブルク『資本蓄積論』の問題関心に重ね，日本資本主義の歴史的な制限傾向を把握することである。

山田は，その際に特に注意すべきは，日本資本主義の「段階的基調」である「産業資本確立過程」が「半隷農的小作料」と「半隷奴的労働賃銀」との「二重関係」を「同時」的に「編制」づける過程であり，併せて「産業資本確立」と「帝国主義転化」との「二重関係」を「同時」的に「規定」[41] づける過程である点にあると言う。さらにそれを「基礎規定」として「軍事的半農奴制的金融資本」の「成立確立」が「進行」し，それを「基準」

37）ルカーチ〔1924〕訳書7-13頁
38）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉221頁
39）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉214頁
40）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉214-215頁
41）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉219頁

に「一般的危機」が「展開」[42] するに至ると言う。ここに，終局的課題である体制的危機下の日本資本主義の総体的分析，その分析基準を得るためにこそ産業資本確立過程分析に力点を置くという「捉え返し」[43] の方法論が鮮明に示される。

さらに，この点について今一歩立ち入った検討を加えるなら，この捉え返しの方法論を支える軸心になっているのが，産業資本確立＝帝国主義転化＝金融資本成立確立⇒一般的危機の展開という日本資本主義の段階的諸過程の急迫性の結節点である，日本資本主義の帝国主義【直接転化】[44] 論である。山田は実に，日本資本主義は「労働手段素材・鉄（産業の筋骨＝武器の根幹）不足」のゆえに「直接」的に帝国主義としてのみ確立する＝帝国主義へ直接転化すると把握するのである。

すなわち，帝国主義世界体系の規定性が貫徹する下で資本主義化して行かざるを得ない国（段階性と後発性との二重性）の場合には【軍事を軸に再生産構造が形成】されざるを得ないのであると把握し，日本帝国主義を【軍事的＝略奪的＝帝国主義】と規定するのである。ここに，山田『日本資本主義分析』における純経済過程と政治的暴力の連関把握の【主導的視角】が成立する。そしてこの点において山田『日本資本主義分析』はルクセンブルク『資本蓄積論』の問題意識と分析視角を継承することとなる。

但し，山田は資本主義の「特定段階」の「特定国」[45]（帝国主義世界体系の体制的危機の下におけるその一環としての日本帝国主義）分析という次

42）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉219頁

43）大島〔1982〕15頁。大島はそこで，日本資本主義の「一般的危機」の「合理的理解」への「扉」が「開」かれるからこそ「産業資本確立の過程」の「規定」が「鍵」になるのだと強調している。

44）中根〔2022〕427頁の注35）他。山田『日本資本主義分析』刊本における産業資本確立と帝国主義「転化」の「同時」性の把握は，その「草稿」においては「労働手段素材・鉄（産業の筋骨＝武器の根幹）不足の日本での産業資本確立は，同時に，直接に，帝国主義としてのみ実現」と把握され，正しく直接転化論である。ここから明らかなように，山田の日本帝国主義の把握の仕方はレーニン『資本主義の最高段階としての帝国主義』＝『帝国主義論』〔1917〕の諸標識を前提にしたものでは無い。

元において，初めてルクセンブルクの純経済過程と政治的暴力の連関把握という視角を導入した。その意味では山田における純経済過程と政治的暴力の連関把握という視角には，ある限定性がある。その背景には，市原〔2000〕が正当に指摘したように，山田が未だ「決して」マルクス『資本論』第2部における「再生産論」の「批判的分析」を「なさなかった」[46]という理論的限界が横たわる。

B　山田『日本資本主義分析』の副次的視角：半農奴制的農業と資本主義の「相互依存」論

以上の「段階的」視角に導かれ,「範疇的」視角が定まってくる。それは「半農奴制的零細耕作」と「資本主義」との「相互規定」[47]関係を把握することである。換言すれば，ルクセンブルク『資本蓄積論』の言う，非資本主義的社会経済領域（半農奴制的零細耕作）と資本主義との【相互依存】[48]関係を把握することである。ここに，山田『日本資本主義分析』における純経済過程と政治的暴力の連関把握の【副次的視角】が成立する。

山田は，その際に特に注意すべきは，帝国主義に直接転化して行く「軍事的財閥的資本主義」[49]—「半農奴制的零細耕作」と「相互規定的」な「関係」に「組み合わされ」る所のそれ—が，日本の場合「強力的」に「設定」[50]される点にあると言う。日本資本主義の再生産過程は軍事的要因により強力的に設定されると強調するのである。

45）山田〔1956〕『著作集』第5巻159頁
46）市原〔2000〕145頁
47）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉215頁
48）中根〔2022〕427頁の注35）他。山田『日本資本主義分析』刊本における半封建的土地所有制下の半農奴制的零細農業と資本主義の「相互規定」把握は，その「草稿」の初発においては「相互依存」と把握されている。
49）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉215頁
50）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉215頁

C　山田『日本資本主義分析』における日本資本主義の基本規定:「強力的性質」論

以上の文脈より，山田『日本資本主義分析』の「草稿」における【労働手段は逆に軍事工廠から生産される】[51] とする把握，また『日本資本主義分析』第２編「旋回基軸」「第一分析 機構」での「軍事工廠における生産装置の優位と一般的な生産低位」[52] なる把握，すなわち【顚倒的矛盾】[53] という把握は，軍事を軸に再生産構造が形成されざるを得ない関係を指す。そして，この関係を再生産構造の核心に持つ日本資本主義の【軍事的半農奴制的性質】[54] なる基本規定は，その【強力的性質】[55] を示したものであると言い得る。

そして，その論理構成の含意は，兵器＝破壊手段（再生産過程から脱落してしまう浪費的性格を持つ）生産を軸にして日本資本主義の社会経済的な再生産構造が形成されざるを得ない（従って，極めて強い軍国主義イデオロギーの経済的な基盤が形成されて行かざるを得ない）ということであり，【「惨事創出」型の再生産構造】にならざるを得ないということである。

すなわち，日本資本主義の再生産過程は「戦争に貫かれた循環」＝【戦争循環】[56] とならざるを得ない。この関係の下，日本ブルジョアジーは「軍事的地主的」性質を持たざるを得ず，絶対主義的天皇制軍事官僚および半封建的寄生地主と共にその一翼として政治的「覇権」に「参與」[57] するに留まると把握される。

51）中根〔2022〕427-428頁
52）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉138頁他
53）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉138頁他
54）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉23頁他
55）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉120.215頁
56）戦争循環という把握を初めて示したのは，井汲卓一「最近における経済情勢と経済恐慌（上）」『日本資本主義発達史講座』第1回配本所収〔1932〕である。尚，この点については中根〔2016〕270頁参照。
57）中根〔2022〕427頁の注35）他。山田『日本資本主義分析』の「草稿」の初発においてブルジョアジー「覇権」とされた把握は，当該草稿進行と共に短期日で「覇権参與」へと深化する。

D　山田『日本資本主義分析』における日本資本主義の変革主体論：国際的連繋性

その上で，顚倒的矛盾を析出した第２編「旋回基軸」の「第一分析　機構」の分析結果を受け,「第二分析　労働力」では強力的な日本資本主義下の「労働力」が，その各々が担う生産力段階の相違に基づき「等級制」で把握され，結合（序列）―訓練（陶冶）―闘争（集成）の内に「プロレタリアートの成立」[58] が析出されるに至る。

尚, ここでも特に注意すべきは, 析出される労働―変革主体が直接に「一般的危機」期当代の主体であるという点である。「第二分析　労働力」の叙述根拠となる「労働統計」，なかんずく「編制」[59] 項の諸表を吟味すれば，若干の例外を除き，全て「一般的危機」期当代のものであることが明らかとなる。ここに第２編「旋回基軸」の「B　総括」を跳躍点に，直接，当代の危機分析へ向かう根拠が与えられる。

その上で，軍事機構＝キイ産業における「キイ」[60] 労働者の闘争，四つの搾取「型」に重層編成された「厖大」な半奴隷的「労働力群」の闘争，かかる半奴隷的「子女」と「手工」と「労役」の「供給源」たる「半農奴制的零細耕作」における農民の闘争，「竹橋騒動（兵士）」[61] の摘録に示される兵士の闘争，「植民地」[62] 労働者の闘争，以上の統合が示され，「生産力の発達」に対する「桎梏」[63] と化した「資本の巨大なる隷役機構」の「破砕」[64] が展望されるに至る。その展望は，資本関係の破砕という把握の仕方に端的に示されるように，ブルジョア民主主義革命の徹底として開始さ

58）中根〔2022〕418頁
59）中根〔2012〕38頁。山田『日本資本主義分析』「統計索引」の「労働」項の中の「編制」項に属する諸表は全15表であるが，その内12表が「一般的危機」期のものである。
60）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉171頁他
61）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉269頁
62）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉178頁他
63）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉214頁
64）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉88頁

れ，世界革命過程の一環としてのみ進行＝完結する資本関係揚棄の全過程として示される。留意すべきはその変革展望が終始一貫，国際的連繋―世界革命過程の一環たるダイナミズムで示されている点である[65]。

《付論❶》：山田『日本資本主義分析』と軍需品生産表式との理論的な位置関係

山田は，敗戦―占領下「民主主義革命期」[66] 只中の山田〔1948〕において「軍需品生産の場合―転化式Ⅲ」として山田自身の軍需品生産表式を示し，その「序言」において「マルクス」と「結合」して「想起」されるべき「ローザの名」[67] と記し，ルクセンブルクの軍需品生産表式の問題提起を高く評価した。以上の点に鑑みれば，山田は戦前の『日本資本主義分析』の執筆時点において，少なくとも，軍需品生産表式に基づく把握を行い得る視角を確立していたと推測し得る[68]。

但し筆者の見地からすれば，山田の軍需品生産表式そのものを吟味すれば，それは整然たる均衡表式であるにも関わらず，ルクセンブルクの軍需品生産表式から理論的把握の仕方において後退していると思われる。なぜなら，軍需品の生産というマルクス『資本論』第２部第３篇「再生産表式」論の次元よりも一層「具体的」な問題を取り扱うにも関わらず，「国家」範疇の導入を拒み，「租税の徴収による労働者階級の収奪」の契機の導入も拒むからである。それは，何としても『資本論』第２部第３篇の狭義「再生産表式」論の次元へと問題を収斂させようとする山田の発想自体に淵源すると考えられる。

65）変革展望を「一国」次元で以外は語るべきでないという風潮が蔓延するのは，旧ソ同盟におけるスターリニズムの覇権以降，特にコミンテルン解散の後である。国際スターリン主義は「世界革命」を論じる者をボルシェビキ左翼反対派（ボルシェビキ・レーニン主義派）に淵源するトロツキー主義者の主張とみなした。

66）山田〔1948〕『著作集』第１巻56頁

67）山田〔1948〕『著作集』第１巻56頁

68）中根〔1999〕54頁。尚，同様の把握を行った論稿に，根津〔2009〕８頁注（11）がある。

尚，この山田の軍需品生産表式把握の限界面を全面的に指摘し，軍需品生産表式を深化させようとした論稿に井村〔1990〕がある。その論点は多岐にわたり，ルクセンブルクの問題提起を全面的に継承して「国家」範疇の導入および「租税の徴収による労働者階級の収奪」契機の導入を行っており，極めて説得的である。山田〔1956〕がルクセンブルクの提起した労働者階級への課税＝収奪による軍需品生産という問題を「剰余価値」の「相対的」な「増大」と同一視し，そこに問題を解消したことに対しても，井村はそれが失当であることを端的に指摘している。

そして更に重要な事実は，この山田〔1948〕「序言」において，「刊行者側」から寄せられた「再生産論を日本資本主義分析へ具体化する理論的展開」を「示すべき」との要望に対し，それには「若干の媒介環」の「解明」を必要とするが，再生産表式の「基礎的な関係」の「範囲」に「問題限定」された『再生産過程表式分析序論』ではその要望に「したがいえなかった」[69]と言明していることである。この言明の持つ意味は先行研究の全てが見落として来たが，これは，軍需品生産表式は直接には日本資本主義分析の媒介環にはなり得ないということを山田自身が言明したものとして極めて重要である。

この点に関して筆者が述べたいことは，軍需品生産表式に基づく把握を行い得る視角は山田『日本資本主義分析』の草稿執筆時点において確立されていたし，それが『日本資本主義分析』の理論的な基礎になっていると言うこと，そしてそれにも関わらず，直接的な理論的媒介環としてまでは位置づけられていなかったということである。

それでは，いかなる意味で理論的基礎になり得たのかと考えるに，山田〔1954〕に示されるように，日本帝国主義がその一翼に位置する帝国主義世界体系の「危機」[70]を基礎的に表示するものとして軍需品生産表式を位

69）山田〔1948〕『著作集』第１巻57頁
70）山田〔1954〕『著作集』別巻66頁

置づけたのではないかと推察し得る。また，いかなる意味で直接的な理論的媒介環としてまでは位置づけられなかったのかと考えるに，軍需品生産表式は軍事の問題を再生産構造に位置づけるが，軍事を軸に再生産構造が形成される過程自体を表示したものでは無いという点にあるのではないかと推察し得る。

《付論❷》山田『日本資本主義分析』における「外的」市場＝半農奴制的零細農業

筆者は『日本資本主義分析』における「半農奴制的零細耕作」と「資本主義」の相互依存関係の規定が，ルクセンブルク『資本蓄積論』の言う非資本主義的社会経済領域（＝半農奴制的零細耕作）と資本主義の新陳代謝関係という視角を継承する把握の仕方であると考える。

日本資本主義においては，半農奴制的な零細耕作農業経営によって生計を立てる半農奴的小農民の内の【周縁労働力（＝女子と次男以下の男子）】の【短期的再生産費】＝当面の衣・食・住を充たす部分が賃銀労働力の労働力価値＝労賃の水準を決定づける。それは半農奴的小農民の内の【中核労働力（＝戸主および直系男子）】の【長期的再生産費】＝次世代の生殖・教育など「イエ」の再生産を含む分に見合う水準には至らない。その意味で「低廉」な労賃水準である。

しかし，実に低廉とは言え，この労賃水準は，半農奴的小農民の内の周縁労働力の短期的再生産費を上回るため，半農奴的な農業に従事している限り，自らの再生産費すら得られない周縁労働力は賃銀労働力へ転化して行く。しかし，労賃の水準は半農奴的小農民の内の中核労働力の長期的再生産費に見合う水準には至らないため，中核労働力は高率小作料徴収後の残余現物収入が労賃収入の水準を上回る限り，半農奴制的な農業労働に従事し続ける。

以上，日本資本主義の賃労働力となる上述の周縁労働力は，ルクセンブルク『資本蓄積論』第３編「資本蓄積の歴史的諸条件」の言う「外的市場」

＝「非資本主義的な社会経済領域」である半農奴制的な零細耕作農業をその供給源としている。尚，ここで言う半農奴的小農民の内の周縁労働力はマルクス『資本論』における「相対的過剰人口」の一形態である資本主義的農業下の「潜在的過剰人口」とは論理次元の上で異なる。なぜなら「潜在的過剰人口」は資本主義の「内的市場」に資本蓄積の結果として存在するが，上述の周縁労働力は資本主義の「外的市場」に資本運動の前提として存在するからである。

この，半奴隷的賃銀労働者の供給源（同時に「軍事機構＝キイ産業」の財政的基礎でもある地租の徴収源）である半農奴的小農民の世帯生計の維持（困窮生計を補充する労賃，必要労働部分にまで喰い込む高率小作料納付後の僅少な残余部分，その相互依存関係）が日本資本主義の蓄積＝興隆の絶対条件である。そして，かかる関係の下における半農奴制的零細農業経営の内実は『惨苦の茅屋』[71]＝家族成員が人間的に発達し得ない内実を持つという性格を持つ。

従って，日本資本主義の資本蓄積過程は，資本主義の「外的市場」である非資本主義的社会経済領域を構成する半農奴制的零細農業の再生産と，それとの連関における資本主義の再生産，その統一としての二重過程となる。以上，この点からも山田『日本資本主義分析』はルクセンブルク『資本蓄積論』の問題意識と分析視角を継承するものとなる。

3　山田『日本資本主義分析』第２編の基本性格：『日本資本主義分析』の論理上の背骨

以上の行論において，山田が『日本資本主義分析』第２編にて，❶帝国主義世界体系の段階規定の貫徹下で行われる後発国の資本主義化に内包される，軍事を軸に再生産構造が形成されざるを得ない関係の意義を浮き彫

71）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉54頁他

りにし，❷強力的日本資本主義の帝国主義への直接転化による再生産構造の質的変化をその歴史的制限傾向の具現として論定し，❸それを通じ，「半農奴制的零細耕作」と「資本主義」の相互依存の論理（『日本資本主義分析』第１編ならびに第３編）の総括と労働―変革主体論への切り返し（『日本資本主義分析』の終局的課題）という二重の総括を行っていることを示した。

以上の確定はまた，『日本資本主義分析』に関する従来の主流的理解に対する批判的な補足を内包するものである。すなわち，従来『日本資本主義分析』最大の論理的な特徴とされてきた「半農奴制的零細耕作」と「資本主義」の相互依存の論理は，実は帝国主義世界体系の段階規定貫徹下で行われる後発国の資本主義化に内包される顚倒的矛盾の論理を前提とするものであると言い得る。換言すれば，強力的な日本資本主義が自らを軍事的＝略奪的＝帝国主義へと成型して行く際，最大の，不可欠の手段として自ら半封建的性格をまとって行く，かかる関係にあると言い得る。一言にして，軍事要因を理解の核心に含まない，単なる半封建的資本主義論としての『日本資本主義分析』理解は，その魂をつかみ得ない，去勢された『日本資本主義分析』理解に陥らざるを得ないと言い得る。

銘記すべきは，第２編「旋回基軸」を山田『日本資本主義分析』の【論理的な背骨】として位置づけることが山田『日本資本主義分析』を内在的に理解する上で決定的であると言うこと，これである。この全関連の下，『日本資本主義分析』は「野蛮的」至酷の上に「文明的」至酷を「累加」する「一典型」[72] である軍事的＝略奪的＝日本帝国主義全体制そのものの「破砕」[73] を展望することとなる。

72）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉214頁
73）山田〔1934〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉88頁

4　山田『日本資本主義分析』第２編の歴史的含意：蓄積の「再版＝原始的蓄積」段階

かかる山田『日本資本主義分析』第２編「旋回基軸　軍事機構＝キイ産業の構成」はある歴史的含意を持つ。すなわち，強力的な日本資本主義の帝国主義への直接転化段階では兵器＝破壊手段（社会的再生産過程から脱落してしまう浪費的性格を持つ所のそれ）生産を軸にしてその社会経済的な再生産構造が形成されざるを得ず，従って，極めて強い軍国主義イデオロギーの経済的基盤が醸成されざるを得ず,「惨事創出」型再生産構造にならざるを得ないということである。

この歴史的含意は，国際的連繋下での日本革命（ブルジョア民主主義革命の徹底として開始され，世界革命過程の一環としてのみ完結する資本関係揚棄の全過程）への前進か，さもなければルクセンブルクが警告した現代的野蛮への日本的な退行かという示唆に及ぶものである。すなわち国際労働者階級の一翼たる日本プロレタリアートによる危機の変革的打開が弾圧・封殺される限り，アジアへの侵略戦争―「神風特別攻撃隊」[74] の体当たり攻撃―帝国主義アメリカ軍による原爆投下（戦時国際法違反の最大の戦争犯罪）という大惨事の創出による人為的な窮極的野蛮状態への逆行が資本によって強制され，この窮極的野蛮状態から「再版＝原始的蓄積」を反復して行かざるを得ないという資本蓄積の退廃的柔軟性を把握する論理を内包するものである。

74）この所謂「特攻」に臨んだ隊員一人一人が，その直面した軍の圧壁の下，尚，どれ程の真剣さを以て自身の生と向かい合ったかについては，例えば，宮野〔1982〕を参照。また戦争の激化に伴って，戦死・戦病死の他，訓練死・事故死も増加せざるを得なかった。例えば，中根利久〔1989〕166-168頁を参照。そこには，1943年11月28日の未明，濃霧下，陸軍士官学校生を載せたトラックが池袋にて貨物列車の機関車と激突し，トラックに乗車の29名中15名即死，１名が４日後に死亡，11名重傷（軽傷２名のみ）という惨事に遭ったことが記されている。尚，中根利久は本稿筆者の実父であり，この難に遭って重傷を負った。

山田『日本資本主義分析』は刊行直後，所謂「労農派」主流[75]（向坂逸郎他）から集中砲火を浴び，さらに敗戦直後，日本における労働者政党の当時の理論的指導層の一部（神山茂夫・豊田四郎他）から総批判の対象とされた。しかし，ルクセンブルク『資本蓄積論』と同じく，幾度葬られても同書は甦り，今日の日本の反戦民主運動と日本社会科学の知的伝統の中に根づいている。その所以は日本資本主義の歴史的発展過程の構造的把握の深みにあると考えられる。

結語―《純経済過程と政治的暴力の連関把握》視角の継承―

本稿は，その生涯を反戦と国際労働者階級解放の運動に捧げたローザ・ルクセンブルクの主著『資本蓄積論』の決定的編である第３編「蓄積の歴史的諸条件」の第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」を検討し，同章が『資本蓄積論』第３編の二重の総括章であることを論証した。そして，資本蓄積の帝国主義段階における軍国主義的蓄積への重心移行が蓄積の【「惨事創出」段階】への推転を意味すること，さらに国際的規模での社会変革への前進が封殺される限りは【再版＝原始的蓄積】を反復して行かざるを得ないことを述べた。そしてかかる把握への道を拓いたルクセンブルクの視角が【純経済過程と政治的暴力の連関把握】にあると論じた。

さらに，日本帝国主義の運命的段階に対峙して革命的活路を提示せんとした山田盛太郎の主著『日本資本主義分析』の決定的編である第２編「旋回基軸　軍事機構＝キイ産業の構成」を検討し，同編が『日本資本主義分

75）世上「労農派」の論客とされる猪俣津南雄は決して安易な『日本資本主義分析』批判に与しなかった。彼が『日本資本主義分析』刊行直後，『東京朝日新聞』1934年３月26日号に寄稿した書評において，『日本資本主義分析』について「補強工作」が必要であるとしつつ，日本帝国主義の基礎を「階級的見地」に立って分析するという「難事業」を遂行しつつあるほとんど「唯一の書物」であるという評価をしていたことは特筆に値する。彼は，私見では「講座派」「労農派」なる区分けを超えた《独立マルクス主義者》の高峰である。この点，中根〔2024〕103-105頁を参照。

析』の論理的背骨をなすことを論証した。その上で，帝国主義世界体系の段階規定貫徹下での後発国の資本主義化に内包される，軍事を軸に再生産構造が形成されざるを得ない関係が【「惨事創出」型の再生産構造】へと帰着せざるを得ないこと，また危機の変革的打開が封殺される限りは「再版＝原始的蓄積」を反復して行かざるを得ないことを述べた。そしてかかる把握への道を拓いた山田の視角もまた「純経済過程と政治的暴力の連関把握」にあり，ルクセンブルクの視角が山田『日本資本主義分析』の論理の核心に継承されたと論じた。

より以上の展開はこれを他日に期し，ここでは以下の確認を以て本稿の結びとしたい。すなわち，山田による敗戦―占領下日本の「旧秩序の変革」と「再版＝原始的蓄積」なる二重過程把握は山田〔1962a〕において初めて登場する。それは山田自身も中央農地委員会委員として主体的に尽力した占領下の「民主主義革命」が圧伏されたことの痛苦の確認に他ならない。すなわち，戦前段階において一度は葬り去られたかに見えた，山田『日本資本主義分析』が示した変革展望は，南〔1977〕が指摘したように「戦後民主変革」の「厳たる過程」において「鮮やかに甦った」[76] のであり，日本民衆は敗戦―占領下の日本ブルジョアジーを圧倒し，世界権力たるアメリカ帝国主義占領軍と直接対峙するに至る。

しかし，アメリカ帝国主義占領軍は民主革命勢力に対する「松川事件」等の謀略「作戦行動」[77] を遂行し，占領下日本の民主主義革命を挫折に追い込むに至る。今日の日本国民の圧倒的大部分が忘却するか，歴史の＜挿話＞としてのみ記憶する，かかる歴史的断層の再把握。その屈辱的な真の歴史的意味を噛みしめることこそ，ルクセンブルク『資本蓄積論』の論理が含意し，山田が戦後日本に与えた「旧秩序の変革」と「再版＝原始的蓄積」なる二重の規定を精確につかむ基礎となる。戦後日本資本主義が「根

76）南〔1977〕317頁
77）松本〔2012〕59頁

っから帝国主義」的な「冷戦植民地」[78] ＝【愚者の楽園】として漂流し続ける根源を把握するために。（了）

【謝辞】本稿は2024年９月14日，経済理論学会第72回研究大会（立教大学）第３分科会「20世紀マルクス主義の理論的意義―21世紀への知的展開探求―」において発表した第３報告を基礎に推敲加筆したものである。筆者は本報告の執筆開始時，また草稿執筆の途上において三度，原伸子先生（法政大学名誉教授）から懇切な助言と励ましを頂いた。ゆえに，本稿は原先生からの助言と励ましが有って，初めて成稿し得たものである。ここに記して感謝することを許されたい。

78）南〔1976〕105頁

【主要参考文献：五十音順】

■市原健志〔2000〕『再生産論史研究』八朔社
■井村喜代子〔1990〕「再生産表式による軍需生産の分析」富塚良三・井村喜代子共編『資本論体系』第４巻有斐閣
■内田義彦・田添京二（N.N.Nの筆名で発表）〔1949〕「「市場の理論」と「地代範疇」の危機－日本資本主義分析における再生産論適用の問題によせて－」:『内田義彦著作集』第10巻〔1989〕岩波書店143-179頁
■大島雄一〔1982〕「『日本資本主義分析』の軌跡－「再生産論の具体化」と構造論＝危機論－」: 土地制度史学会『土地制度史学』第94号1-19頁
■大内力〔2000〕『日本経済論（上）』東京大学出版会
■神山茂夫〔1947〕『日本資本主義分析の基本問題』岩崎書店
■向山景一〔1971〕「ローザ「蓄積論」の現代的意義」同共著『ローザ・ルクセンブルク論集』情況出版
■向山景一〔1971〕「労働力商品の特殊性―大内秀明氏への反論―」:『情況』1971年5月号87-98頁
■後藤康夫〔2002〕「軍需品表式と生産力展開－再生産論の具体化における媒介項をめぐって（2）」: 福島大学『商学論集』第70巻第４号117-142頁
■後藤康夫〔2009〕「構造と主体－山田盛太郎『日本資本主義分析』の変革像と戦後展開素描－」: 福島大学『商学論集』第78巻第２号92-98頁
■小林賢齊〔2001〕『資本主義構造論－山田盛太郎東大最終講義－』日本経済評論社
■小山弘健〔1948〕「日本帝国主義の基本問題」: 小山弘健・浅田光輝『天皇制国家論争－日本帝国主義とファシズム－』〔1971〕三一書房11-34頁
■向坂逸郎〔1947〕『日本資本主義の諸問題－資本主義と農村の階級分化』黄土社
■沢田幸治〔1999〕『再生産論と現状分析－日本資本主義の戦前と戦後－』白桃書房
■高木隆造〔1981〕「『日本資本主義分析』と賃労働」明治大学『明治大学大学院紀要経営学篇』第18巻19-35頁
■寺出道雄〔2002〕「『日本資本主義分析』再読―日本マルクス主義とロシア構成主義―」: 慶應義塾経済学会『三田学会雑誌』第95巻１号
■寺出道雄〔2008〕『山田盛太郎　マルクス主義者の知られざる世界』日本経済評論社
■トロツキー，レフ〔1919〕「カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルク」:『トロツキー研究』第1号〔1991〕柘植書房3-16頁

■長岡新吉〔1980〕「『日本資本主義分析』の歴史と論理－一つの「講座派」批判」:『経済学批判』第８号32-46頁
■中西洋〔1982〕『増補　日本における「社会政策」・「労働問題」研究』東京大学出版会
■中根利久〔1989〕「池袋殉難を偲ぶ」: 日本陸軍士官学校第58期生会『58期会報』第20号166-168頁
■中根康裕〔1999〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』の原像」:『経済科学通信』第90号49-55頁
■中根康裕〔2000〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』の起点－『講座』共同研究会と山田氏の方法的独自性－」:『政経研究』第75号127-133頁
■中根康裕〔2002〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』の「段階的」媒介環」: 福島大学『商学論集』第71巻第１号37-52頁
■中根康裕〔2012〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』第二編「旋回基軸」の基本性格－同書「統計索引」の「労働」統計年次検討を通じて－」:専修大学『専修大学社会科学研究所月報』第594号28-39頁
■中根康裕〔2014a〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』の誕生過程と全体構成」:『経済科学通信』第134号73-78頁
■中根康裕〔2014b〕「断章 :『講座』の異端＝山田盛太郎『日本資本主義分析』原初論文の誕生」: 科学的社会主義研究会『研究資料』第12号2-9頁
■中根康裕〔2015〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』の協働性と独創性－『分析』の誕生過程と全体構成の検討より－」:法政大学『経済志林』第82巻第３号65-107頁
■中根康裕〔2016〕「『日本資本主義発達史講座』山田盛太郎論文と同僚論文の共有点と相補性―『講座』の協働的性格によせて―」:専修大学『専修大学社会科学年報』第50号257-275頁
■中根康裕〔2018〕「ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』第32章「資本蓄積の領域としての軍国主義」の論理構成と歴史的含意」:法政大学『経済志林』第86巻第２号225-245頁
■中根康裕〔2022a〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』の草稿の検討」:法政大学『経済志林』第89巻３号395-429頁
■中根康裕〔2022b〕「秋元寿恵夫訳『ローザ・ルクセンブルク獄中からの手紙』を読む－秋元の非戦への意志を託した訳書－」:『病体生理』第121号37-45頁
■中根康裕〔2023〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』「紡績業の興隆」項の草稿について―草稿に記された戦後時点の加筆痕にも触れて」:法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』第781号59-68頁

■中根康裕〔2024〕「図書紹介　龍井葉二『猪俣津南雄―戦略的思考の復権』」: 法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』第791・792合併号103-105頁
■二瓶敏〔1985〕「山田盛太郎著『日本資本主義分析』」:『経済』1985年5月号
■根津基和〔2009〕「『再生産構造・農民層分解』論と農山村―統合的再考」: 『林業経済研究』第55巻３号1-11頁
■原朗〔2016〕「『日本資本主義分析』原稿の一考察－山田盛太郎関係資料の検討－」政治経済学・経済史学会『歴史と経済』第230号1-18頁
■バーシェイ，E，アンドリュー〔2004〕山田鋭夫訳〔2007〕『近代日本の社会科学』NTT出版
■藤田実〔2017〕『戦後日本の労使関係』大月書店
■松岡利道〔1988〕『ローザ・ルクセンブルク－方法・資本主義・戦争－』新評論
■松本善明〔2012〕『謀略』新日本出版社
■宮野澄〔1982〕『血壁―ある時代の青春：陸軍士官学校56期生』毎日新聞社
■マトゥイレフ，エー，ヴェ〔1923〕横倉弘行訳〔1993〕「ローザ・ルクセンブルクの蓄積論」: 市原健志・横倉弘行「資料：マトゥイレフの論文『ローザ・ルクセンブルクの資本蓄積論』について」中央大学『商学論纂』第35巻第１・２号
■南克巳〔1969〕「アメリカ資本主義の戦後段階－若干の基礎指標」土地制度史学会『土地制度史学』第45号59-78頁
■南克巳〔1970〕「アメリカ資本主義の歴史的段階－戦後＝「冷戦」体制の性格規定－」土地制度史学会『土地制度史学』第47号1-30頁
■南克巳〔1976〕「戦後重化学工業段階の歴史的地位－旧軍封構成および戦後＝「冷戦」体制との連繋－」宇高基輔他編『新マルクス経済学講座』第５巻有斐閣
■南克巳〔1977〕「山田盛太郎『日本資本主義分析』岩波文庫版への解説」
■南克巳〔1995〕「冷戦体制解体とＭＥ＝情報革命」土地制度史学会『土地制度史学』第147号21-37頁
■南克巳〔1997〕「グローバリゼーションと資本主義のゆくえを考える：配付レジュメ」（基礎経済科学研究所第20回研究大会「記念講演」滋賀県青年会館97年７月20日）
■毛利健三〔1971〕「ファシズム下における日本資本主義論争」長幸男・住谷一彦編『近代日本経済思想史Ⅱ』有斐閣
■守屋典郎〔1953〕『恐慌と軍事経済』青木書店

■守屋典郎〔1967〕『日本マルクス主義理論の形成と発展』青木書店
■守屋典郎〔1980〕『日本マルクス主義の歴史と反省』合同出版
■山崎隆三〔1989〕『近代日本経済史の基本問題』ミネルヴァ書房
■山田盛太郎〔1929〕「再生産演習参考資料Ⅰ」『山田盛太郎著作集』別巻〔1985〕岩波書店147-161頁
■山田盛太郎〔1931〕「再生産過程表式分析序論」『同著作集』第１巻〔1983〕58-274頁
■山田盛太郎〔1934〕『日本資本主義分析－日本資本主義における再生産過程把握－』岩波書店・〔1977〕岩波文庫版初刷〈山田生前版〉
■山田盛太郎〔1935〕「再生産表式と地代範疇－資本主義の構造と農業形態－」（講演の要約）『同著作集』別巻247-258頁
■山田盛太郎〔1948〕『再生産過程表式分析序論』復刊「序言」『同著作集』第１巻55-57頁
■山田盛太郎「経済学原理（講義案）」〔1956〕『同著作集』第５巻〔1984〕岩波書店107-161頁
■山田盛太郎〔1962a〕「戦後循環の性格規定」『同著作集』第５巻3-10頁
■山田盛太郎〔1962b〕「戦後再生産構造の段階と農業形態―Iv＋m＝IIcのSchemaの崩壊と再編―」『同著作集』第５巻11-35頁
■山田盛太郎〔1968〕「戦後日本の再生産構造の特質」『同著作集』別巻95-108頁
■吉原泰助他〔1976〕『マルクス資本論入門』有斐閣
■ルカーチ，ジェルジ〔1921〕「マルクス主義者としてのローザ・ルクセンブルク」：城塚登・古田光共訳『歴史と階級意識』〔1975〕白水社65-96頁
■ルカーチ，ジェルジ〔1924〕渡辺寛訳〔1965〕『レーニン論』青木文庫
■ルクセンブルク，ローザ〔1913〕長谷部文雄訳〔1934〕『資本蓄積論－帝国主義の経済的説明への一寄与－』岩波文庫（上・中・下）
■ルクセンブルク，ローザ〔1916〕片岡啓治訳〔1969〕「社会民主党の危機（ユニウスの小冊子）」『ローザ・ルクセンブルク選集』第３巻現代思潮社
■ルクセンブルク，ローザ〔1920〕長谷部文雄訳〔1934〕『資本蓄積再論－亜流はマルクスの理論から何を作ったか－』岩波文庫
■ルクセンブルク，ローザ〔1925〕岡崎次郎・時永淑訳〔1978〕『経済学入門』岩波文庫
■ローラ，リュシアン〔1930〕草ケ江二郎訳〔1932〕『資本蓄積論入門』共生閣
■涌井秀行〔2010〕『戦後日本資本主義の根本問題』大月書店

Rosa Luxemburg and Moritaro Yamada's *The Analysis of Japanese Capitalism*

Yasuhiro NAKANE

《Abstract》

In this paper, an attempt to grasp the core of the theory of Rosa Luxemburg, a Polish-born female democratic Marxist, is presented.

In addition, it is also shown that the logical structure of *The Analysis of Japanese Capitalism* by Moritaro Yamada, a Japanese democratic Marxist, is based on Rosa Luxemburg's theory.

Thus, it is demonstrated that the best aspects of Rosa Luxemburg's theory were inherited by Japanese Marxism.

The excellence of Rosa Luxemburg's theory is that it showed that war is indispensable for the development of capitalism and that militarism is an attractive field for the accumulation of capital.

Democratic Marxists should make use of this core of Rosa Luxemburg's theory in their analysis of capitalism.